

令和4年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第62巻6月号(通巻755号)

風土



6

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

田鳥が放鳥冷酒免されよ

(句集『竹取』より昭和三十六年作)
「放鳥」は葬式などの時に、死者の供養のために、飼ったり捕らえておいた鳥を放ちやることを言います。鶴川村にはそのような風習が残っていました。しかし桂郎師には放ちやる鳥はありません。丁度田圃から鳥が飛び立ったのを見て「放鳥」として、なき母への供養としたのです。また母の死の輩みを紛らわすためにお酒が手放せません。母へ謝りながら冷酒を重ねるのです。

老鶯や座布團足らず皿足らず

(句集『竹取』より昭和三十九年作)
「風土」は昭和三十五年に神山杏雨主宰、石川桂郎編集として立ち上りました。選はほとんど桂郎師でした。雑誌刊行の支援は杏雨でしたが、三十九年に杏雨が経済的に行き詰まり、主宰を降りてしまいました。「風土」は休刊を余儀なくされましたが、再建のために「風土」の仲間が七畳小屋に集まったのです。「座布團足らず皿足らず」に、「風土」再発行へのみんなの熱気が表れています。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

師を訪へり粉を噴く寒の竹づたひ

(句集『月虹』より平成二十二年作)
「師を訪へり」とありますが、桂郎師はどうに亡くなっています。これはかつて桂郎師を訪ねた折の回想の句です。「寒の竹づたひ」とありますので、寒の頃に七畳小屋を訪ねたのでしょう。七畳小屋へ行くには竹藪の小道を通らねばなりません。冬に入ると竹は幹が粉を噴いたようになります。器師は七畳小屋を何度も行き来していますので、その景色が鮮やかに蘇るのです。また桂郎師と語らったことを懐かしく思い出しているのです。

天上の花の茶会に招かれて

(句集『月虹』より平成二十二年作)
「斎藤小夜さん逝く」と前書きがあります。小夜さんは「風土」の幹部同人で、器師の信頼も厚く、マネージャー的な存在でした。また茶道の師範もしており幅広く活動した人です。小夜さんの死は器師にとって大きかったと思います。天上の人となってしまった小夜さんへ「あなたはそちらの茶会に招かれていつてしまったんですね」と呟っています。

一 礼

南うみを

露の臺たんと摘みたる野に一礼
鍬に錆畑になづな咲かしめて
をさなさの春のあら草引きにけり
つばくろへ天地返しの鍬上げて
芋植うや土の湿りにうなづきつ
涅槃図のうしろ若狭の潮けむり
水を撥ね春の雀となりにけり
山椒和若狭の水はほとぼしる
泥亀の鳴きしか泡ののぼりくる

舞鶴・漁連 三句

くろめじの艶の丸胴糶られけり
トロ箱の春の鰯は足に押す
糶終へし尻が春ストーブ囲む



竹間集

同人作品



山笑ふ

中根 美保

注連縄の先は穂のまま山笑ふ
その中に白鳩一羽風光る
豆雛の衿こまやかに重ねつつ
伴奏はポルカに変はり薔薇芽ぐむ
白木蓮ひらき方位を見失ふ
あたたかや台座に余る大木魚
春の土掬ひおもちやのシヨベルカー

鎮守の杜

小林 共代

囀りや鎮守の杜をふくらます
寄生木のみどりいやます神の苑
水草生ふ真鯉の影のゆつたりと
昼からは白き波たつ花曇
小鳥引く真只中の道祖神
菜の花や祠明るくなりけり
流木の止まりし岸夕朧

涅槃西風

間島あきら

追ひかけて春の風花掌に受くる
春一番日は全円に磨かるる
山の端に残れる空や梅と月
冴返る空也上人像の口
炎待つ枯れの底なる新芽かな
菊坂に一葉訪はむ花ミモザ
りゆうりゆうと青竹の艶涅槃西風

花吹雪

内藤 静

汀子・兜太のけんかを嘉す花吹雪
一連といふが悲しき目刺かな
蛇を踏むマリアの塑像かぎろへる
出航の後の埠頭の朧かな
うららかや水陸両用バスの水脈
停泊の船の聳ゆる彼岸潮
暖かや魚籃を提げて観世音

桃の花

森高 武

ばりばりと薄氷踏みて車行く
手水舎（舞）の薄氷突つく仁王門
春の雪止まずタイヤを替へてより
雨樋に溢れて春の雪しづく
榛の木の芽吹や鳥の集まりぬ
釣り人の手持無沙汰に春の海
浜の村結ぶ細道桃の花

啓 蟄

土井ゆう子

くつきりと岳三月の風尖る
一つ老い明日は桃の節句なる
いそいと訪ふ娘の住まひ雛祭
啓蟄や外出せぬ日続きをり
せせらぎの音階変はり猫柳
春吹雪ナースに血圧測らるる
断崖のどれもが羅漢春怒濤

風光る

池田 光子

川底の石のぬめりや春兆す
春霞戦艦のごとタンカー浮く
初音かな閑伽桶の水溢れさせ
木の芽吹く遺伝子学科の鉄の門
花曇り甘く炊き込む油揚げ
数秒で渡る鉄橋飛花落花
風光る白やはらかき烏骨鶏

金目鯛

落合 絹代

室に入る梯子の先の闇に独活
鶯よ五山一位と知りゐるや
美容室の今日の華やぎ桃の花
あたたかや漁港なればの漁師飯
大振りな金目鯛きんめの煮付け春の昼
霞みても伊豆七島の一つ浮く
子に会ひし思ひや自画の内裏雛

無限遠点

堅山 道助

春を待つ駆けだしさうなランドセル
一山の花盗人となるもよし
揚雲雀無限遠点ある如く
下萌に佇つ病妻の息づかひ
鳥帰るマリア・ヨセフを地に残し
鶯の糞美しき伽藍かな
鶯のそれきり鳴かず知恩院

青き踏む

浜 福恵

青き踏む歩行器土に嵌まりもし
泥に包まり蝮は眠りへ昼の月
棘に刺されて血を噴く指や草臚
土を啄む柄長もゐたり蓬摘む
連翹や漁期終ひの海鼠舟
野遊内縁、外縁、それぞれにびに酔うてその夜の深睡り
娶る子よ嫁ぎゆく子よ花菜飯

紅しだれ

門伝 史会

初蝶を追ひて散歩の道を変ふ
啓蟄の土に突きさす犬の鼻
晩年の夢つつましく苗木植う
手を振れど振り向かず行く卒業子
暖かや母を語れば娘にかへる
花冷えの格子の間に仏の眼
紅しだれ一人仰げばみなあふぐ

山河集

同人作品



南うみを選

春氷解けなば会はむたれかれに
赤石 梨花

昼月の淡くかかりて雛かな
遠出することなきわれに水温む
海峽は潮上げをり芽立時
かたくりや戦火を遠くうつむきて

溜息の一つや二つ鬼やらひ
山田 健太

啓蟄の霞ヶ浦の野点かな
つぼみ持つ梅のふくらみ生けにけり
突き出でて隣家の梅の盛りなる
行子ていきとして畦道ちよくを入学児

足跡は熊かそれともスノーシュー
高橋まき子
白梅の仄かに紅きくもり空
樹下に見上ぐ空いつぱいの紫木蓮

花ミモザ光を吸つて丸くなる
田起しの土塊の上薺咲く

暖かや父の胡坐に子を収め
杉本薬王子

芽柳の滝の如くに六角堂
触れ合ひて光となりぬ春の雨
日本橋通りの桜吹雪かな
早緑の枇杷の角芽は天を衝く

春霜や鼻奥つんと歩き出す
石井美智子

春星や煙突一本藻塩小屋
春雨や芭蕉も濡れし柑満寺
白神の幻めきぬ霧ぐもり
人力車しだれ桜に触れて過ぐ

風土独語／南 うみを



海峡は潮上げをり芽立時 赤石 梨花

「芽立時」は三月から四月にかけて木の芽が立つ頃を言う。それに「海峡の潮」を取り合わせた。この時期はまた干満の差が一年で一番大きくなる。「潮上げをり」とはそのことだ。海峡全体の潮が上がると表現し、自然の営みをダイナミックに描いた。

清明の樹陰に展ぐ遊山箱 小原美美子

「遊山箱」は徳島独自の物で、遊山の時に弁当などを入れて携帯する三段の小箱である。「清明」の花の頃、ひと日を野に遊ぶ「野遊び」の世界である。「野遊び」で春の花を愛でることから、桜の花を楽しむ習慣が生まれてきた。「遊山箱」から花見の原風景まで想像が広がる句である。ちなみに作者は徳島出身。

として畦道を入学児 山田 健太

「入学」(てきちよく)とは、付んだり、行きつ戻りつすることを言う。「入学児」とあるが、「入学」から新一年生であろう。畦道で何に興味を示しているのか。その様子が「入学」で捉えられている。

花冷の仁王の臍の楔かな 森田 節子

これはまた、面白いところに目を付けた。仁王さんの臍の所に

楔が打ち込まれているのだ。像の繋ぎのためだが、痛々しさを感ずる。「花冷」がそれを増幅する。

花ミモザ光を吸つて丸くなる 高橋まき子

ミモザは、黄色い粒状の花がぎっしりと花穂状に咲く。春の花の中でもひとときわかる。作者はそれを「光を吸つて丸くなる」と断定した。なるほどどうなずける。

春めくや薄紅色の亀の舌 六車 佳奈

俳句は現実(リアル)を写すのではなく、言葉によって現実(リアル)を現出する。この場合「薄紅色の亀の舌」がそれに当たる。そうだったではなく、そうであると断定して春らしさを表出した。

暖かや父の胡坐に子を収め 杉本薬王子

「暖か」は現実の暖かさや心のあたたかさを伴う季語である。この句を読むと「父の胡坐」の暖かさや、子を愛しむ父の心のあるあたたかさが共に伝わり、味わいのある世界になっている。

土蔵から潮騒の間へ古雛 浜田美佐子

この句は「潮騒の間へ」と措くことで、「古雛」の立ち位置を的確に読み手に伝えている。潮騒の間こえる海辺の雛の家なのだ。代々の古雛を蔵から取り出して、「雛の間」を作り、今年も潮騒を聞かせるのである。

風土集



南うみを選

新聞紙におるどの形や花見酒 舞鶴 小原美美子

手びねりの皿にのせ蓬餅

鈴の首に歩をせかさるる涅槃西風

馬耳山のみみ隠したるはなぐもり

清明の樹陰に展ぐ遊山箱

満開の椿の内の冥くあり 川崎

木の芽風埴輪の馬の眼閉づ

花冷の仁王の臍の楔かな

オルゴールの人形をどる花の昼

ピストロへ誘ふ風の花ミモザ

細やかな梅の影ある借楽園 水戸

白梅の満ちし古里父ひとり

風呂敷の端に座りて花見かな

廃校の和みの桜吹雪きけり

噴水の空押し上げてゐるところ

標本にピンの直立冴え返る 高槻 六車 佳奈

春めくや薄紅色の亀の舌

駅長の目線ななめをつばくらめ

あたたかや本読む人に挟まれて

かきわけて散らす野の香や野蒜掘り

青鰻や母が貝剥き祖母和へて 舞鶴

海猫渡る図面引きある造船所

土蔵から潮騒の間へ古雛

直会や御饌の一つにわらび餅

耳削ぎと言ひて若布株を切る漁師

草若葉はじまる時の息づかひ 東京

伊豆にて

目崎 聖子

坂道をくだる港の日うらうら

春潮の遠く大島かくれけり

見上ぐれば忘れ形見の花の門